

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告113

# 富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書

—市道任海13号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2024

富山市教育委員会

# 富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書

—市道任海13号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2024

富山市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、富山市任海地内に所在する任海宮田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 工事立会・発掘調査は、富山市建設部道路整備課が事業主体となる市道任海13号線改良工事に伴い、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書で報告する工事立会・発掘調査の概要は次のとおりである。
  - (1)平成30年度工事立会  
調査面積 66.5㎡  
調査期間 平成31年3月12日～平成31年4月1日  
担当者 堀内大介、野垣好史、納屋内高史、宮田康之  
(富山市教育委員会埋蔵文化財センター)
  - (2)令和2年度発掘調査  
調査面積 80.8㎡  
調査期間 令和2年10月2日～令和2年11月9日  
担当者 堀内大介、泉田佑希、納屋内高史(富山市教育委員会埋蔵文化財センター)
  - (3)令和4年度発掘調査  
調査面積 74.3㎡  
調査期間 令和4年10月24日～令和4年11月25日  
担当者 泉田佑希、仲あずみ、成瀬暉、納屋内高史、三上智文  
(富山市教育委員会埋蔵文化財センター)
- 4 実測・トレス等の整理作業の一部は、北陸航測株式会社富山支店に委託して実施した。
- 5 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託し、第4章に成果を掲載した。
- 6 現地調査から報告書作成にあたり、任海地区のご協力をいただいた。記して謝意を表する。
- 7 出土遺物・原図・写真は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡 例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第Ⅶ系である。方位は真北、水平水準は海拔高である。
- 2 遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せて標記した。番号は遺構種別にかかわらず01からの通し番号を付した。  
SB(掘立柱建物) SD(溝) SE(井戸) SK(土坑) SP(ピット) SX(不明遺構)
- 3 土層、遺物観察表の色調は「標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に準拠した。
- 4 挿入中の網掛けは次のとおりである。  
////// : 地山    ■ : 油煙・煤
- 5 参考文献は第5章の後にまとめた。ただし、第4章の自然科学分析は分析の末尾に掲載した。
- 6 本文中の参考文献の表記について、一部を次のように略した。  
教育委員会→教委      埋蔵文化財センター→埋セ  
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所→富山県財団
- 7 第1図、第2図は、富山市基本図をもとに作成した。

## 目次

例言・凡例

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 工事立会の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査の方法	6
第2節 層序	6
第3節 平成30年度工事立会・令和2年度発掘調査1区 遺構	8
第4節 平成30年度工事立会・令和2年度発掘調査1区 遺物	13
第5節 令和2・4年度発掘調査 遺構	18
第6節 令和2・4年度発掘調査 遺物	24
第4章 自然科学分析	27
第1節 粒度分析	27
第5章 総括	29
引用・参考文献	31
図版	
報告書抄録	

## 図目次

第1図 調査区位置図	2	第12図 令和2・4年度発掘調査遺構図2	20
第2図 周辺の遺跡分布図	5	第13図 令和2・4年度発掘調査遺構図3	21
第3図 基本層序	6	第14図 令和2・4年度発掘調査遺構図4	22
第4図 調査区全体図	7	第15図 令和2・4年度発掘調査遺物図1	25
第5図 平成30年度工事立会・令和2年度発掘調査1区遺構図1	9	第16図 令和2・4年度発掘調査遺物図2	26
第6図 平成30年度工事立会遺構図2	10	第17図 分析No.1(溝埋土)の粒度分布図(粒径頻度および積算頻度曲線)	28
第7図 平成30年度工事立会遺構図3	11	第18図 分析No.2(地山堆積物)の粒度分布図(粒径頻度および積算頻度曲線)	28
第8図 令和2年度発掘調査1区遺構図	12	第19図 周辺の古代遺構図	29
第9図 平成30年度工事立会遺物図	14	第20図 周辺の中世～近世遺構図	30
第10図 令和2年度発掘調査1区遺物図	15		
第11図 令和2・4年度発掘調査遺構図1	18		

## 表目次

第1表 出土遺物一覧	16	第4表 各試料の粒度分析結果	27
第2表 令和2・4年度発掘調査遺構一覧	23	第5表 粒度分析による頻度%および統計値	28
第3表 粒度分析を行った試料とその詳細	27	第6表 分級度、歪み度、尖度の評価	28

## 図版目次

図版1 平成30年度工事立会(1)	図版7 令和2・4年度発掘調査(3)
図版2 平成30年度工事立会(2)	図版8 令和2・4年度発掘調査(4)
図版3 平成30年度工事立会(3)	図版9 令和2・4年度発掘調査(5)
図版4 平成30年度工事立会(4)	図版10 令和2・4年度発掘調査(6)
図版5 令和2・4年度発掘調査(1)	図版11 出土遺物(1)
図版6 令和2・4年度発掘調査(2)	図版12 出土遺物(2)

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査にいたる経過

任海宮田遺跡は、昭和63年～平成3年度に富山市教育委員会（以下、富山市教委）が実施した分布調査の結果を受け、平成5年刊行「富山市遺跡地図（改訂版）」に「任海宮田遺跡」（No.201503）として掲載された。平成25年刊行「富山市遺跡地図」で、遺跡番号を「任海宮田遺跡」（No.2010654）に変更し、その後、富山県文化振興財団（以下、富山県財団）等による発掘調査により、飛鳥・奈良・平安・中世の大規模集落遺跡であることが判明した。

対象地は、岐阜県神岡町（現飛騨市）の神岡鉾山から排出されたカドミウムが神通川を經由し、流域の水田地等の環境を広く汚染した範囲に含まれる。昭和45年には農業用地の土壤汚染防止法が公布され、翌年から土壤汚染調査が行われた結果、汚染土壤地域に指定された。昭和54年から農地の土壤を復元して、大型は場に区画整理する県営公害防除特別土地改良事業（以下、公特事業）が開始され、それに伴い平成7～10年度に埋蔵文化財試掘調査で遺跡の有無を確認した。この結果、遺跡が見つかった場所において地下保存できない場合は、順次発掘調査を実施した。

平成8年11月公特事業埋蔵文化財打合せ会が開かれ、「アスファルト未舗装農道の本調査除外」が決定した。今回の調査対象となった市道任海13号線（平成16年市道認定）は、当初アスファルト未舗装農道として整備されたことから、発掘調査除外地となった。

平成29年に公特事業に伴う換地処分が完了し、同年から7ヵ年かけて市道任海13号線改良工事が開始されることとなった。平成29年度工事では15.9mの区間で道路南側に擁壁工・舗装工が計画され、擁壁工の工事立会を行うこととなった。平成30年度工事では34.0mの区間で工事立会を実施したが、擁壁工の工事掘削深が遺跡を損壊することが判明したため、令和2年度工事からは、未施工区間の60.5mについて本発掘調査対応に切り替えた。（堀内・泉田）

## 第2節 工事立会の経過

平成29年度は富山市道路河川整備課（当時）から、平成30年2月21日付け道河整第175号で文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が富山市教委へ提出され、同年2月22日付け埋文329号で富山県教育委員会へ副申した。工事立会は同年3月7・8日に行ったが、掘削は遺構面まで到達しなかった。

平成30年度は富山市道路河川整備課（当時）から平成31年3月6日付け道河整第188号で埋蔵文化財発掘の通知が富山市教委へ提出され、同年3月11日付け埋文358号で富山県教育委員会へ副申した。同年3月12日に道路南東側から工事立会を行ったところ、途中から工事掘削が遺構面まで達することが確認された。そのため、一時工事を中断し、市道路河川整備課と協議を行った。遺構が確認された範囲については記録保存をすることとなり、同年3月25日～4月1日に実施した。（堀内）

## 第3節 発掘調査の経過

工事が遺構面まで及ぶことから、令和2年度以降の工事に対する埋蔵文化財の保護措置について令和元年11月から令和2年3月まで、富山市道路整備課と協議を行った。その結果、擁壁工未施工区間60.5mの掘削工事が遺跡を損壊することから、発掘調査を行うこととなった。

令和2年度は、隣田の地権者からの要望で、田への乗入用スロープ部分における擁壁工4.0mは工事の除外となった。また、道路南西側の擁壁工51.0m分において、工事の余掘り部分に対する地権

者の同意が得られなかったため、当初計画（令和4年度調査区）より市道の内側に1m移動した位置で発掘調査を実施することとなった。調査面積は80.8㎡である。

令和4年度に、隣田の地権者から同意を得られたため、擁壁工を当初の計画位置に戻し、スロープ部分も施工することとなり、追加の発掘調査を実施した。調査面積は74.3㎡である。また道路は、生活道路として供するため仮設アスファルト舗装とし、将来本設の市道として施工する際は、未調査部分は発掘調査を実施することで合意に至り、今回の発掘調査対象から除外した。（泉田）

#### 第4節 整理作業の経過

整理作業は、平成30年度と令和2年度調査分の図面トレースや出土品実測などを北陸航測株式会社へ委託した。期間は令和3年5月21日から同年12月28日である。自然科学分析は株式会社パレオラボに委託した。報告書作成は、令和5年11月14日から着手し、令和6年2月29日に本書を刊行して完了した。（泉田）



第1図 調査区位置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

富山市は平成17年の市町村合併により、富山県の中央部から南東部まで県域の三分の一を占める広大な市域となった。市域の地形は西～南部の丘陵・山地と北～東部の平野に大別される。

任海宮田遺跡が所在する富山市任海地区は、富山平野南部に位置する。富山平野は、北は富山湾、東は早月川扇状地、西は呉羽丘陵に接し、南は飛騨山地から広がる低～高位段丘からなる台地に面する。また富山平野は複合扇状地で、常願寺川や神通川が流れ、特に常願寺川水系が形成した扇状地の発達が顕著である。遺跡の西側を北流する神通川は、天正12(1584)年以前は富山市押上付近から金屋へと流れていたが、天正12年の大水により現在の流路に変わったとされる(五十嵐2016)。

調査地は、神通川中流域右岸、神通川と熊野川が合流する地点から南方4kmに位置する。周辺にはとやま健康パークや富山南総合公園が所在する。(堀内・泉田)

### 第2節 歴史的環境

任海宮田遺跡を含む神通川右岸の緩扇状地に集落が形成されるのは、弥生時代後期後半以降で、中心となる時期は古代から中世である。

旧石器時代の遺跡は周辺では確認されていない。縄文時代も遺跡分布は希薄で、栗山A遺跡(17)、伊豆宮II遺跡(18)、大利屋敷遺跡(22)、悪王寺遺跡(35)で縄文土器が散布する程度である。

弥生時代前期～中期の遺跡も希薄で、弥生時代後期になり、熊野川両岸に集落が確認されるようになる。左岸の友杉遺跡(4)では、弥生時代後期の竪穴建物1棟を検出した(富山県財団2010)。右岸の上野井田遺跡(31)では、弥生時代終末期の周堤をもつ竪穴建物、掘立柱建物などを検出した(富山市教委2021)。若竹町遺跡(36)では、弥生時代後期、古墳時代前期の竪穴建物を検出した(富山市教委2008a・2015)。墳墓は、南の大沢野台地に福居古墳や伊豆宮古墳(20)が築かれる。伊豆宮古墳は15×23mの方形墳または八角形墳と推定され、河原石積の横穴式石室から鉄器片が出土した(富山市教委1988)。

古代に入ると本遺跡周辺でも開発が進み、多くの集落が形成される。熊野川右岸には黒瀬大屋遺跡(24)、黒崎種田遺跡(25)、上野井田遺跡、左岸には本遺跡を含め友杉遺跡、吉倉B遺跡(5)、南中田D遺跡(8)などが濃密に分布する。黒瀬大屋遺跡では、8世紀後半～10世紀初めの一面庇掘立柱建物や竪穴建物3棟などを検出し、施軸陶器や「中田」墨書土器、刻書土器などが出土した(富山市教委2018)。黒崎種田遺跡では、馬形や暗文土器などが出土した(堀内2022)。左岸の吉倉B遺跡では8世紀中葉～10世紀前半の掘立柱建物12棟や竪穴建物59棟を検出した(富山県埋セ1993・1994、富山県財団2005)。南中田D遺跡では、8世紀後半～10世紀前半の竪穴建物61棟を検出した(富山県埋セ1991)。

本遺跡と友杉遺跡では、約270棟を超える竪穴建物・掘立柱建物・礎石建物を検出し、「城長」「観音寺」「寺」「堀田」など800点以上の墨書土器、石帯の帯飾り、施軸陶器、奈良三彩火舎などが出土した。庇付大型掘立柱建物の存在から、公的施設や古代寺院の存在が推測されている。両遺跡は8世紀以降に扇状地の開発を目的とした開墾集落とされる(富山県財団2008・2010)。

中世に入ると本遺跡周辺一帯は徳大寺家領宮河荘に比定され、その荘域は旧神通川の東側と熊野川の西側に広がる細長い広い平野と推定されている(五十嵐2016)。推定荘域内では、本遺跡を含め吉倉B遺跡、南中田D遺跡など古代集落と同じ場所に遺跡が確認されることが多い。熊野川左岸の吉倉

B遺跡では12世紀後半～14世紀中頃の掘立柱建物42棟を確認した(富山県教委1993・1994)。南中田D遺跡では12世紀後半～13世紀、15世紀の掘立柱建物44棟を確認した(富山県教委1991)。右岸の蛭川館跡(27)は、南北2つの郭からなり、周囲は土塁と堀がめぐる中世居館で、堀を除く規模は南北250m、東西110mと県内最大級と推測される。石造物や採集遺物の年代は14～16世紀である(高岡編1998)。蛭川館跡の北にある黒崎種田遺跡では、北部で12世紀後半～13世紀の掘立柱建物や井戸などを検出した(富山県教委2005)。南部で13世紀～16世紀の掘立柱建物や井戸、堀、馬小屋遺構などを検出し、14～15世紀の2つの武家屋敷地を確認した(富山県教委2020)。この地には蛭川氏が12世紀末～16世紀中頃まで拠を構えたとされ、蛭川氏に関連する遺跡と考えられる。

本遺跡では、掘立柱建物200棟以上のほか井戸、土坑、溝などを検出した。10世紀中頃に古代の集落が途絶し、12世紀後半からは建物が一部出現し、13世紀～14世紀前半頃にかけて集落が本格的に展開を見せる。15～16世紀代には、集落は縮小傾向にある(富山県財団2008)。

元龜3(1573)年、上杉謙信が一向一揆衆が立て籠る富山城を包囲するために押上の地向城の1つである押上砦を築いたと伝わるが、その所在地は不明である。

江戸時代には、富山から飛騨に抜ける飛騨街道が熊野川に沿って南北に通り、現在の任海橋付近で岩木道・八尾道が分岐していたことから、遺跡一帯は街道が交差する交通の要衝であった。(堀内)

### 第3節 調査区周辺の既往の調査成果

本遺跡の埋蔵文化財包蔵地範囲は672,139㎡である。西は神通川、東は熊野川に挟まれた緩扇状地帯にあり、度重なる水害を受けていることが発掘調査で明らかとなっている(富山県埋七1996)。本調査区の周辺では、公特事業に伴う試掘調査や本発掘調査などが実施されており、以下に調査概要をまとめる。

#### 平成9年度試掘調査(富山県埋七1999)

公特事業に伴う試掘調査である。調査では古代から中世の集落が確認された。

#### 平成7～9年度発掘調査(富山県教委1999)

市道西荒屋新保線道路改良工事に伴う発掘調査である。古代の竪穴建物や古代～中世にかけての大溝などが確認され、遺物は石帯(巡方)や瓦塔、「墾田」の墨書土器などが出土した。

#### 平成14年度調査C地区(富山県財団2008)

公特事業に伴う本発掘調査である。今回調査区の南側に位置するC13・15地区、北側のC16地区、南東側のC14・23地区では、古代・中世の遺構が上層・下層の2面で確認された。

**古代面** C13・15地区では、調査区を南北に貫く古代の自然流路SD002が検出され、規模は幅14.3m、深さ0.7～0.84mである。C14・23地区では、竪穴建物9棟などが確認された。

**中世面** C13・15地区では掘立柱建物7棟、土坑群などが確認された。一部の遺構は、近世まで時期が下る。C16地区では、調査区を南西から北東に向かって貫く中世～近世の自然流路SD002が確認された。規模は、幅21.0～26.0m、深さ0.2～0.61mと浅い。C14・23地区では、区画溝を伴う掘立柱建物跡が検出された。(泉田)





- 1: 任海宮田遺跡 2: 任海池原寺跡 3: 任海三十町塚 4: 友杉遺跡 5: 吉倉 B 遺跡 6: 栗山権原遺跡 7: 任海鎌倉遺跡 8: 南中田 D 遺跡 9: 南中田 C 遺跡  
 10: 南中田 B 遺跡 11: 南中田 A 遺跡 12: 吉倉 A 遺跡 13: 任海遺跡 14: 任海砂田遺跡 15: 栗山塚 16: 惣在寺高寺 17: 栗山 A 遺跡 18: 伊豆宮 II 遺跡  
 19: 円教寺遺跡 20: 伊豆宮古墳 21: 下大久保遺跡 22: 大利原敷遺跡 23: 押上古墳 24: 黒瀬大塚遺跡 25: 黒崎種田遺跡 26: 八日町遺跡 27: 轉川館跡  
 28: 伏ヶ島遺跡 29: 赤田寺新遺跡 30: 二俣寺跡 31: 上野井田遺跡 32: 二俣北遺跡 33: 二俣遺跡 34: 上野鍋田遺跡 35: 愿王寺遺跡 36: 若竹町遺跡  
 37: 上野亀田遺跡 38: 上野遺跡 39: 安樂寺遺跡 40: 下熊野遺跡 41: 宮保遺跡 42: 尻尾遺跡 43: 新村遺跡 44: 合田遺跡 45: 若草町遺跡

第 2 図 周辺の遺跡分布図

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

**工事立会** 道路南側擁壁部分の掘削工事範囲を対象に実施した。重機で遺構面直上まで掘削した後、ジョレンで人力による遺構検出を行った。その後、移植ゴテを使用して遺構掘削を行った。遺構は半載して掘り下げ、必要に応じて写真撮影と断面図作成を行い、その後完掘した。

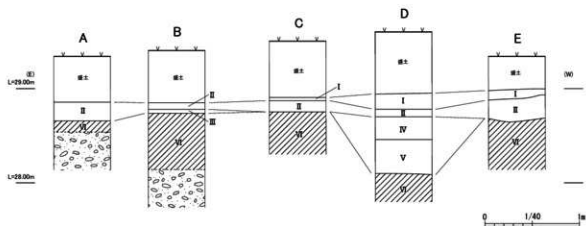
**発掘調査** 調査区は道路南側の擁壁部分である。区割りは、調査区東端から4mごとに1～14区を設定した。表土掘削は重機を使用し、調査区西部は遺構検出面のⅥ層まで、東部は古代の自然流路SD36の上面まで掘削し、一部サブトレンチを設定して掘り下げた。排土は横置きし、飛散防止のためブルーシートで養生した。表土掘削が完了した場所からジョレンで人力による遺構検出を行った。遺構掘削は移植ゴテを使用し、遺構は半載して掘り下げ、必要に応じて写真撮影と断面図作成を行い、その後完掘した。調査完了後は埋め戻しを行った。

記録作業は、平面図はトータルステーションを用いて作成し、断面図は手実測で行い、縮尺は1/20とした。測量基準は世界測地(第Ⅶ系)による。写真はデジタル一眼レフカメラで撮影した。全景写真は高所作業車を用いて撮影した。

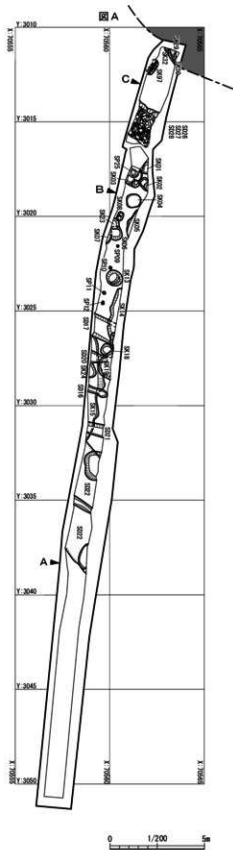
遺物はコンテナ5箱分が出土した。洗浄と注記等を行った後、口縁部が残るものを中心に図化を行った。平成30年度と令和2年度の出土遺物整理は令和3年度に委託して実施し、令和4年度の出土遺物は、令和5年度に富山市教育委員会埋蔵文化財センターで整理した。トレースはデジタルトレースで行い、遺物写真撮影はデジタル一眼レフカメラを使用した。

### 第2節 層序(第3・4図)

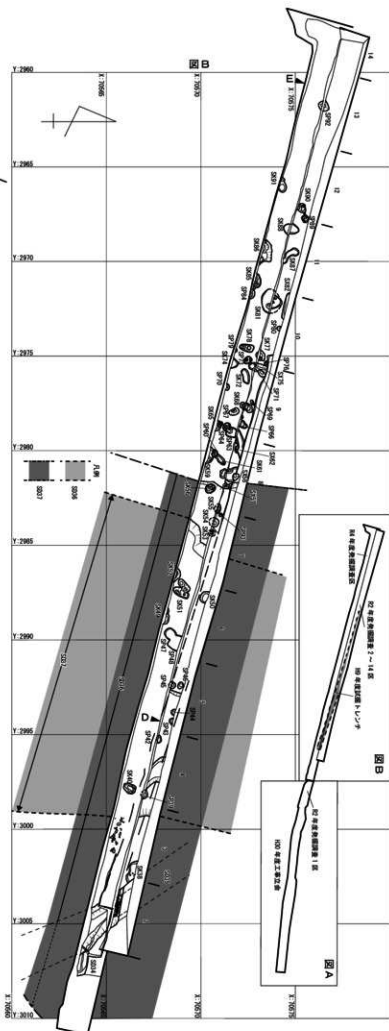
調査地の地表面は標高約29.5mである。基本層序は調査区南壁のA～E地点で観察した(第3・4図)。Ⅰ層は旧水田耕作土の灰色土で、層厚は3～17cmである。Ⅱは床土の明黄褐色土で、層厚6～20cmである。Ⅲ層は古代以前の堆積土で、調査区の東部で検出した。層厚約4cmである。Ⅳ層は中世～近世の自然流路埋土、Ⅴ層は古代の自然流路の埋土である。Ⅵ層は黄褐～褐色土を主体とする地山があり、古代・中世の遺構が検出される。東側の低地部分は礫堆積がある。



第3図 基本層序



第4図 調査区全体図



### 第3節 平成30年度工事立会・令和2年度発掘調査1区 遺構

#### 1 平成30年度工事立会

平成30年度調査区（以下、調査区）では、25基の遺構を確認した。同一面に古代、中世および近世以降の遺構が検出される。調査区の東部で検出した流路SD22より東側は地山の礫層が隆起しており、遺構は確認されなかった。以下、遺物が出土した遺構を中心に報告する。

##### (1) 土坑（第6・7図、図版2～4）

SK02（第6図） 調査区西部に位置する。短軸0.54m、長軸0.56m以上の隅丸方形を呈するが、北側が調査区外であるため、規模は不明である。深さは南側が0.25mで、北側が一段深くなっており0.80mである。埋土は灰黄褐色砂質シルト～にぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。古代の掘立柱建物の柱穴である可能性がある。

SK03（第6図） 調査区西部に位置する。SP25より古い。長軸0.64mの隅丸方形を呈するが、南側が調査区外であるため、規模は不明である。深さは0.54mである。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は中世土師器（1～3）が出土した。

北東側に直径0.40m、深さ0.64mのピットがあるが、SK03とは別のピットの可能性がある。

SK04（第6図） 調査区西部に位置する。一辺0.75mの隅丸方形を呈する。深さは0.42mで、底面は平坦である。埋土は上層が褐灰色砂質シルトを基調とし、下層は黄褐色砂質シルトである。遺物は須恵器（4）、土師器が出土した。古代の掘立柱建物の柱穴である可能性がある。

SK06（第6図） 調査区西部に位置する。SK07・23より古い。短軸0.64m、長軸0.70m以上の隅丸方形を呈する。深さは0.68mで、底面は礫層のため凸凹である。埋土上層はSK07・23により削平されている。下層は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は鉄滓（5）が出土した。

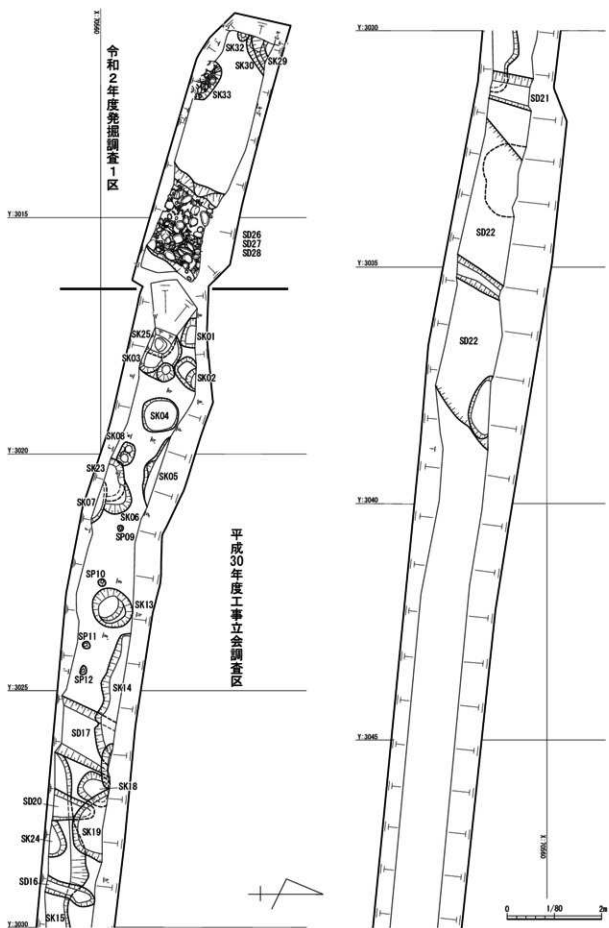
SK07（第6図） 調査区西部に位置する。SK06・23より新しい。直径0.94mの円形を呈するが、南側が調査区外であるため、規模は不明である。深さは0.48mで、底面は平坦である。埋土は灰黄褐色砂質シルト～にぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。

SK13（第6図） 調査区中央に位置する。直径0.80mの円形で、深さは0.90m、底面は平坦である。中央に柱痕を確認し、柱径が約0.20mに復元できる。掘立柱建物の柱穴と考えられる。埋土は最下層がにぶい黄褐色砂質シルト、中間層は黒褐色砂質シルトを基調とし、上層はにぶい黄褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。調査区内では、柱痕が確認できる同規模の土坑（柱穴）が見つからなかったため、掘立柱建物の規模は不明である。

SK14（第7図） 調査区中央に位置する。長軸2.80mの方形を呈するが、北側が調査区外であるため、規模は不明である。SD17より新しい。深さは0.60mで、底面は平坦である。埋土は灰黄褐色砂質シルトと暗褐色砂質シルトの上下2層である。遺物は須恵器（6）、中世土師器（7）が出土した。

SK15（第7図） 調査区中央に位置する。SK24、SD16・17・20・21より古い。検出長約5.20m、検出最大幅0.74mの大型土坑または溝（流路）で、南側が調査区外であるため、規模は不明である。深さは0.56mであり、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。遺物は中世土師器（8）が出土した。

SK19（第7図） 調査区中央に位置する。SD20より新しい。長軸1.56m 短軸0.65m以上の楕円形を呈し、北側が調査区外であるため、規模は不明である。深さは0.38mであり、底面は平坦である。埋土は暗褐色砂質シルト、にぶい黄褐色砂質シルト（礫多量混り）の上下2層である。遺物は須恵器（9）、中世土師器（10・11）が出土した。



第5図 平成30年度工事立会・令和2年度発掘調査1区遺構図(1)

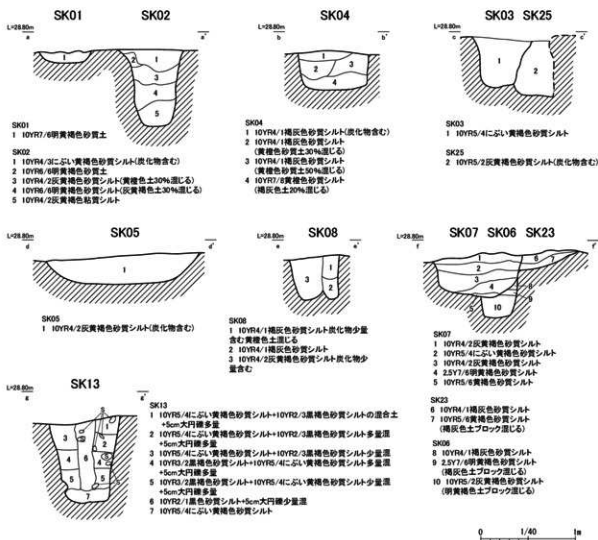
SK23 (第6図) 調査区西部に位置する。SK06より新しく、SK07より古い。直径約0.90mの円形を呈する。深さは0.18mである。埋土は上層が褐色砂質シルト、下層が黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は須恵器(12)、中世土師器が出土した。

(2) 溝 (第7図、図版3・4)

SD16 調査区中央に位置する。SK15より新しい。N-26°-E方向の溝で、南は調査区外に延びる。検出長約1.0m、幅0.26～0.40mで、深さは0.22mである。埋土は褐色灰色砂質シルトの単層である。遺物は中世土師器(13)が出土した。

SD17 調査区中央に位置する。SK15より新しく、SK14より古い。N-35°-E方向の溝で、南北とも調査区外に延びる。幅1.22mで、深さは0.64mである。底面はほぼ平坦である。埋土は上層が黒褐色砂質シルト、下層が灰黄褐色砂質シルトの上下層2層である。遺物は須恵器(14・15)、土師器、中世土師器(16)、鉄釘が出土した。

SD22 調査区東端に位置する。N-60°-E方向の流路で、南北とも調査区外に延びる。幅約4.5mである。深さは0.54～0.68mで、東側の方がやや深い。埋土は、上層が褐色砂質シルト～灰黄褐色砂質シルト(礫多量混じり)、下層が黒褐色砂質シルト(礫少量混じり)である。遺物は須恵器(17)、



第6図 平成30年度工事立会遺構図(2)



土師器 (18)、中世土師器 (19～24)、珠洲 (25・26)、越前 (27)、龍泉窯系青磁 (28) が出土した。出土遺物から上層が15世紀後半、下層が15世紀前半と考えられる。

## 2 令和2年度発掘調査1区

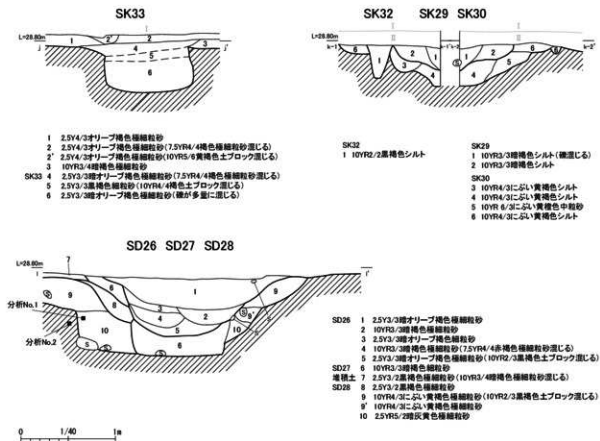
令和2年度発掘調査1区は平成30年度工事立会の西隣に位置することから、この節で報告する。遺構は7基確認し、時期は古代、中世、近世である。以下、遺物が出土した遺構を中心に報告する。

### (1) 土坑 (第8図、図版5)

SK29 1区西端で検出した。楕円形を呈する。検出径は0.56m、深さは0.23mであるが、遺構の大半が調査区外となるため規模は不明である。遺物は近世の瀬戸碗 (34) が出土した。断面や出土遺物から、近世以降の遺構と考えられる。

SK30 1区西端で検出した。SK29より古い。検出径1.00m、深さ0.40mであるが、規模は不明である。遺物は出土しなかった。SD37の肩部の可能性ある (第20図)。

SK33 1区西部で検出した。楕円形を呈し、長径0.90m、短径0.36m以上、深さは0.53mである。土坑は袋状に掘り込み、ブロック混じり土 (6・7層) とともに人頭大の礫が充填される。礫は河原石で大きさがほぼ揃っているため、人為的に集石したと推定されるが、性格は不明である。集石の最下層から須恵器甕 (35) と用途不明の石製品 (26) が出土した。



第8図 令和2年度発掘調査1区遺構図



## (2) 溝・自然流路(第8図、図版6)

SD26・SD27・SD28 1区東端で検出した溝である。N-55°-E方向に延びる。断面観察から、上層をSD26、中層をSD27、下層をSD28とした。

SD26はSD27より新しく、検出幅1.94m、深さ0.60mである。計4回の掘り込みが確認される。遺物は珠洲の甕(34)が出土した。古代～中世まで存続した溝と考えられる。

SD27はSD28を利用して形成されたと考えられる。検出幅1.53m、深さ0.48mである。遺物は須恵器の杯蓋(33)、土師器片が出土した。古代の溝と考えられる。

SD28は自然流路と考えられ、検出幅2.80m以上、深さ0.74mである。VI層を礫層上面まで削平して形成される。2回の堆積があり、第10層は自然科学分析から、河川の離水後に再堆積したことが分かっている。その上層には、黄褐色土ブロックが混じる黒褐色土が堆積する。その層を掘削する形で第8層が形成される。土層の切り合いから、第8層は古代以前に形成された溝の可能性がある。

## 第4節 平成30年度工事立会・令和2年度発掘調査1区 遺物

### 1 平成30年度工事立会の遺物(第9図、図版11)

SK03 1～3は中世土師器である。1は口径8.4cm、器高2.2cmで、口縁端部外面に一段のヨコナデを施し、口縁端部をつまみ上げる。底部は丸底で、指頭圧痕が残る。16世紀前半に比定される。2は口縁部が外反する。3は底部から体部の破片である。

SK04 4は須恵器の甕の体部である。

SK06 5は鉄滓である。重さ47.5gである。

SK14 6は須恵器の杯B底部で、貼付高台である。7は中世土師器である。内底面に凸圓線が残る。16世紀前半に比定される。

SK15 8は中世土師器である。口径8.8cmで、口縁端部をつまみ上げる。二次被熱がある。

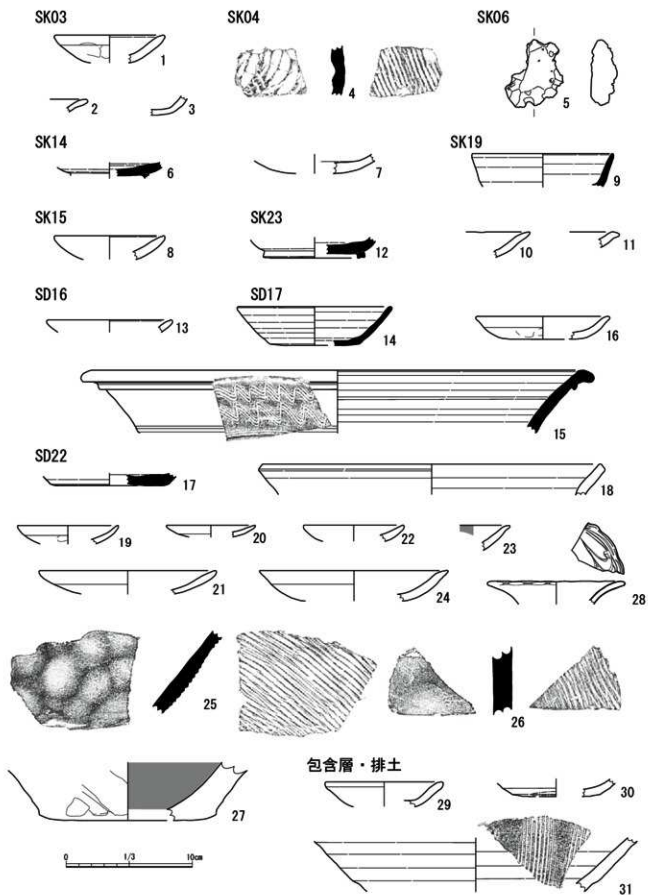
SK19 9は須恵器の杯である。口径11.0cm、器高2.65cm以上ある。10・11は中世土師器である。10は口縁部をヨコナデし外反する。11は口縁部を強くヨコナデし、口縁端部が短く外反する。15世紀後半に比定される。

SK23 12は須恵器の杯B底部である。高台径6.9cmで、貼付高台である。

SD16 13は中世土師器である。口径9.8cmで、口縁端部をつまみ上げる。

SD17 14・15は須恵器である。14は杯Aで、口径12.2cm、器高3.1cmである。15は甕で、口径39.0cmである。口縁部外面に波状文が施される。16は中世土師器である。口径10.3cm、器高1.85cmで、口縁部をヨコナデし外反する。京都系で、15世紀後半に比定される。

SD22 17は須恵器の杯A底部である。18は土師器の甕である。池野正男氏の分類(池野2010)ではB2類で、8世紀中葉に比定される。19～24は中世土師器である。19～21は口縁端部外面に一段のヨコナデを施し、口縁端部を鋭く仕上げる。19は口径7.9cm、器高1.45cmである。20は口径7.0cm、器高0.9cmである。21は口径14.0cm、器高1.9cmである。22は口径7.9cm、器高1.3cmで、口縁端部を丸く納める。19～22は15世紀前半に比定される。23は口縁部を強くヨコナデし外反する。灯明皿で、内面に油煙が付着する。24は口径14.8cm、器高2.4cmで、口縁部をヨコナデし外反する。23・24は京都系で、15世紀後半に比定される。25・26は珠洲の甕の体部である。27は越前播鉢の底部である。内面は使用により摩滅している。二次被熱がある。28は龍泉窯系青磁の棧花皿である。口径10.3cm、器高1.85cmで、内面に櫛状具・ヘラ状具による文様が施される。上田秀夫氏の青磁碗編年(上



第 9 図 平成 30 年度工事立会遺物図

田 1982) の第五期に相当し、14 世紀後半～15 世紀に比定される。

包含層・排土 29 は中世土師器である。口径 9.05cm、器高 1.95cm で、体部が内湾し、口縁部は緩やかに外反する。灯明皿で、底部内面に油煙が付着する。15 世紀前半に比定される。30 は瀬戸の志野皿である。31 は越中瀬戸の播鉢で、一単位 10 条の押し目がある。

## 2 令和 2 年度 1 区の遺物 (第 10 図、図版 12)

SD26 32 は珠洲の甕の体部である。

SD27 33 は須恵器の杯蓋である。

SK29 34 は瀬戸の碗か。

SK33 35 は須恵器の甕の肩部である。36 は石製品である。

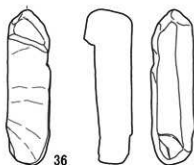
包含層・排土 37 は中世土師器である。口径 8.0cm、器高 1.0cm で、口縁部は緩やかに外反する。14 世紀前半に比定される。38 は瀬戸の浅碗か端反碗の底部である。

SD26



32

SK33



36

SD27



33

SK29

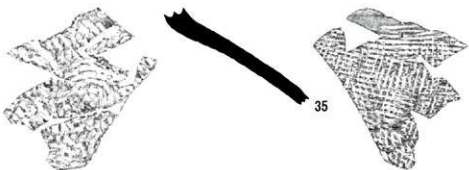


34

包含層・排土



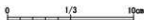
37



35



38



第 10 図 令和 2 年度発掘調査 1 区遺物図

第1表 出土遺物一覧

図	番号	種類	器種	区	出土遺構 出土層記	大きさ (cm)			出土	焼成	色調	成形・調整・裝飾記		備考	
						口径 (長さ)	幅径 (高さ)	高さ (厚さ)				内面	外面		
番号同	1	中世土師器	甕	-	SK01	18.0	-	(2.2)	甕	灰	3YR7-6 褐色	ヨコナテ	ヨコナテ、ナ キニ、ナテ	長石、石英、雲母、シヤモット 状微細片を含む。二次焼成 15世紀後半	
	2	中世土師器	甕	-	SK03	-	-	(1.0)	中々粗	灰	10YR5-3 浅黄褐色	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ		
	3	中世土師器	甕	-	SK03	-	-	(1.30)	中々粗	灰	10YR5-3 浅黄褐色	ヨコナテ、ナテ	ナテ	雲母を含む	
	4	須恵器	甕	-	SK04	-	-	-	密	灰	N7-0 灰白色	同心円瓦長形	平行タテキ		
	5	金銀製品	銅片	-	SK06	120	131	12.1	-	-	-	-	-	-	475g
	6	須恵器	鉢皿	-	SK14	-	-	(1.3)	中々粗	灰	N7-0 灰白色	ヨコナテ	ヨコナテ	胎付直白 長石、石英含む。内面に付 線ナテ	
	7	中世土師器	甕	-	SK14	-	-	(1.30)	密	灰	10YR7-4 に赤い黄褐色	ナテ、凸線部	ナテ	雲母、シヤモット状微細片 を含む	15世紀前半
	8	中世土師器	甕	-	SK15	110	-	(1.8)	中々粗	灰	5YR5-4 に赤い黄褐色	(マメツ)	(マメツ)	雲母を含む。二次焼成	
	9	須恵器	鉢	-	SK19	11.0	-	(2.6)	密	灰	25Y7-2 灰白色	ナテ	ナテ		
	10	中世土師器	甕	-	SK19	-	-	(2.0)	中々粗	灰	10YR7-3 に赤い黄褐色	(マメツ)	(マメツ)	1面に灰けあり 15世紀後半	
	11	中世土師器	甕	-	SK19	-	-	(1.3)	密	灰	10YR7-2 に赤い黄褐色	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナ テ	15世紀後半	
	12	須恵器	鉢皿	-	SK23	-	高台付 (6.0)	(1.6)	密	灰	N6-0 灰白色	ヨコナテ	ヨコナテ ヨコナテ 線ナテ	胎付直白	
	13	中世土師器	甕	-	SD16	180	-	(1.0)	密	灰	25YR2-4 浅黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ		
	14	須恵器	鉢A	-	SD17	12.2	(5.4)	3.1	中々粗	不良	10YR8-1 灰白色	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ、ナ テ	
	15	須恵器	甕	-	SD17	100.0	-	(5.0)	密	灰	5YR-1 灰色	ヨコナテ	ヨコナテ	1面に内面側部、外面に沈線 状に凹文	
	16	中世土師器	甕	-	SD17	103.3	-	(1.8)	密	灰	10YR8-3 浅黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	雲母、15世紀後半	
	17	須恵器	鉢A	-	SD22 上層	-	-	(8.1)	1000	密	N7-0 灰白色	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ、ナ テ またハナテ 含むナテ	長石、石英含む
	18	土師器	甕	-	SD22 上層	127.0	-	(2.4)	中々粗	密	10YR8-3 浅黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	跡多く含む。 胎野分粗 (胎野 200?) 胎2 含む	5世紀前半
	19	中世土師器	甕	-	SD22 下層	170	-	(1.4)	密	灰	7.5YR7-4 に赤い褐色	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナ キニ、ナテ	雲母、シヤモット状微細片 を含む	15世紀前半
	20	中世土師器	甕	-	SD22 上層	170	-	(0.9)	密	灰	2.5YR-4 浅黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ、ナ テ	15世紀前半	
	21	中世土師器	甕	-	SD22 下層	140.0	-	(1.9)	密	灰	10YR8-2 に赤い褐色	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナ テ	15世紀前半	
	22	中世土師器	甕	-	SD22 下層	17.8	-	(1.3)	密	灰	10YR8-2 に赤い褐色	(マメツ)	(マメツ)	15世紀前半	
	23	中世土師器	灯明籠	-	SD22 上層	-	-	(2.0)	密	灰	10YR7-3 に赤い黄褐色	ヨコナテ、ナテ	ナテ	1面に胎野粗 胎野分粗	15世紀前半
	24	中世土師器	甕	-	SD22 上層	114.8	-	(2.4)	中々粗	灰	2.5YR8-4 浅黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ、ナ テ。オキニ	雲母、シヤモット状微細片 を含む	胎野分粗。15世紀後半
	25	須恵	甕	-	SD22 上層	-	-	(0.5)	密	灰	N5-0 灰色	当瓦類	平行タテキ	胎土線含む。長石、 石英含む	
	26	須恵	甕	-	SD22 上層	-	-	-	-	-	-	ヨコナテ	ヨコナテ	胎野分粗	
	27	須恵	鉢皿	-	SD22 上層	-	(10.2)	(4.0)	中々粗	灰	内面：25YR7-4 に赤い褐色 外面：10YR8-2 灰白色	(マメツ)	ナテ、ハナテ オキニ、胎野分 粗入り	内面、外面に胎野分粗。胎野分 粗入り Φ 3mm までの胎野分粗	
	28	瓦類	鉢瓦	-	SD22 下層	103.3	-	(1.8)	密	灰	胎土：N6-0 灰白色	見込みに胎野	-	-	内外胎野粗 (2.5Y7 オキニ 灰色) 上野分粗 (1野 100?) 胎野分 粗含む。14世紀後半～15 世紀
	29	中世土師器	灯明籠	-	胎野分粗	160.0	-	(1.9)	中々粗	灰	内面：10YR3-1 黄褐色 外面：10YR7-2 に赤い黄褐色	(マメツ)	(マメツ)	胎野分粗。雲母含む 15世紀前半	
	30	瀬戸	甕	-	胎野分粗	-	-	(1.4)	粗	灰	胎土：10YR7-2 に赤い黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	内外胎野粗 (5YR-1 灰白色)	
	31	瀬戸	甕	-	胎野分粗	-	-	(4.3)	粗	灰	胎土：10YR8-3 浅黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	内外胎野粗 (5YR-1 灰白色)	
	32	須恵	甕	1	SD26 上層	-	-	-	中々粗	灰	2.5Y5-1 オキニ灰色	同心円瓦長形 タテキ	平行タテキ	胎野分粗を含む	
33	須恵器	鉢皿	1	SD27 上層	-	-	(1.2)	密	灰	25Y7-1 灰白色	ヨコナテ	ヨコナテ	胎土	長石、石英含む	
34	瀬戸	甕	1	SK29	-	高台基座 内径 (2.0)	(1.1)	中々粗	灰	胎土：25Y7-4 に赤い褐色	-	ヨコナテ	ヨコナテ	内面胎野粗 (2.5YR-1 灰白色) 胎土の着色も灰白マメ ツ	
35	須恵器	甕	1	SK33 胎野分粗	-	-	(7.0)	密	灰	3Y7-1 灰白色	ヨコナテ	ヨコナテ、平 行タテキ	胎野分粗。胎野分粗 入り		
36	石製品	砥石	1	SK33 胎野分粗	12.35	3.5	3.8	-	-	-	-	-	-	221.3g 雲母を含む	
37	中世土師器	甕	1	胎野分粗	180	-	(1.0)	密	灰	内面：25YR7-4 に赤い褐色 外面：10YR4-3 に赤い黄褐色	ナテ	ナテ	胎野分粗。胎野分粗 入り	13世紀後半～14世紀	
38	瀬戸	瓦類 瓦片	1	胎野分粗	-	-	(1.6)	中々粗	灰	10YR8-2 灰白色	ヨコナテ	ヨコナテ	内外胎野粗 胎野分粗		

種	番号	種類	器種	区	地上高測 地上水位	大きさ (cm) (上内径×高さ)			動土	構成	色調	成形・調整・調整台		備考
						口径 (高さ)	高さ (動)	器高 (高さ)				内面	外面	
第15回	39	煎茶器	網	2	SK38	1385	高台付 735	575	差	真	10Y7-1 灰色 - 10Y7-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ、 ロクロナデリ はたはへり器 造り組立	真石・石灰少量混 雑色内面にヘウ記号「J」 印行面付 造り組立
	40	煎茶器	杯	8	SK62	(124)	-	(2.0)	差	不具	2.5Y7-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
	41	土師器	小笠蓋 小	8	SK62	3層	-	(1.2)	中今瓶	真	10Y7-6 明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面滑行者 小笠蓋 (10-13) 群見付
	42	煎茶器	杯蓋	9	SK68	(127)	-	(1.1)	差	真	5Y7-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
	43	土師器	網	9	SK75	-	(6.6)	(0.8)	差	真	5Y10-4 濃褐色	(マメツ)	ロクロナデ、 漆器	シャット状筋和付含む
	44	煎茶器	杯	10	SK90	(99)	-	(3.2)	差	真	7.5Y8-3 褐色	ロクロナデ	ロクロナデリ ロクロナデリ 造りナデナデ	9世紀後半
	45	煎茶器	杯蓋	11	SK97	(160)	-	(2.8)	差	真	2.5Y6-1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデリ、 ロクロナデリ	真石・石灰多量含む
	46	煎茶器	杯蓋	5	SK96	-	-	(1.2)	差	真	2.5Y6-1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ、 ロクロナデリ 接手	9世紀中期
	47	土師器	網	6	SK96	-	(6.7)	(2.7)	差	真	2.5Y7-6 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ、 漆器	真石・石灰含む
	48	中世土師器	蓋	3	SK96	(159)	-	(2.0)	中今瓶	真	7.5Y8-3 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	縁多量含む 14世紀
	49	越中瀬戸	鉢	7	SK96	-	(8.8)	(1.7)	中今瓶	真	胎土：10Y7-3 に灰-黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデリ、 ロクロナデリ	内面一部黒胎 (12.5Y8-4 黒 褐色)
	50	近世磁器	小鉢	4	SK96	-	-	(1.6)	差	真	胎土：5Y8-1 灰白色	-	-	口縁部黒胎 (12.5Y8-4 黒 褐色)
	51	高台上段小	高杯 (特 種)	4	SK97	-	(6.5)	(1.3)	差	真	10Y8-3 浅褐色	1号キ	1号キ、(マ メツ)	内外面滑行者 (12.5Y8-4 黒 褐色)
	52	煎茶器	杯蓋	5	SK97	(173)	-	(1.8)	瓶	真	内面：5Y7-2 灰白色 外面：NS-0 - NS-0 黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	9世紀末
	53	煎茶器	杯	4	SK97	(122)	-	(2.0)	差	真	内面：10Y6-1 灰 白色 外面：NS-0 黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	
	54	煎茶器	小笠蓋 小	5	SK97	-	(5.8)	中今瓶	真	真	10Y7-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	黒色縁多量含む、外面スレ あり、地味緑が 底面あり、各キの起出し、 たもみ 内面にシボり状のシワあり 9世紀末
	55	煎茶器	蓋	5	SK97	-	-	-	差	真	NS-0-0 灰白色	同心円状具眼	橋子ナデキ	真石・石灰含む
	56	土師器	網	4	SK97	-	(6.0)	(0.7)	差	真	7.5Y7-6 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	9世紀後半
	57	煎茶器	杯蓋	3	焼田中	(155)	-	(1.2)	差	真	NS-0 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
	58	煎茶器	杯蓋	3	焼田中	(148)	-	(1.2)	差	真	2.5Y7-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
59	煎茶器	杯蓋	12	焼田中	(132)	-	(1.1)	差	真	5Y6-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ		
60	煎茶器	杯入	6	焼田中	-	(7.8)	(1.6)	差	真	2.5Y7-2 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ、 ハラ留り接手		
61	煎茶器	杯	-	焼田中	(142)	-	(2.9)	中今瓶	真	5Y6-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	真石・石灰含む 黒色縁多 量含む 9世紀中期	
62	煎茶器	蓋	13	焼田中	-	-	(5.9)	瓶	不具	内面：2.5Y7-1 灰白色 外面：2.5Y8-2 灰白色	同心円状具眼	平行ナデキ	真石・石灰含む	
63	越中瀬戸	煎茶	9	焼田中	-	-	(3.4)	中今瓶	真	胎土：10Y7-2 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面滑行者 (12.5Y8-4 黒 褐色)	
第16回	64	煎茶器	杯蓋	10	焼田上	ツマ1様 2.45	-	(2.2)	差	真	内面：2.5Y8-1 灰白色 外面：2.5Y7-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	9世紀
	65	煎茶器	杯蓋	11	焼田上	(110)	-	(1.4)	差	真	2.5Y7-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデリ	9世紀後半
	66	煎茶器	杯	7	焼田上	-	-	(2.0)	差	真	5Y6-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
	67	煎茶器	杯	9	焼田上	-	(7.2)	(1.8)	差	真	2.5Y7-1 灰白色	ロクロナデ	同輪へう留り	縁内面にヘウ記号「X」
	68	煎茶器	杯	10	焼田上	(109)	-	(2.8)	差	真	10Y6-1 灰色 - 10Y6-1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
	69	煎茶器	杯	14	焼田上	(124)	-	(3.3)	差	不具	10Y7-2 - 2色 に灰-黄褐色 10Y8-3 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	
	70	土師器	網	10	焼田上	-	(6.2)	(1.8)	差	真	5Y7-6 褐色	(マメツ)	ロクロナデ、 漆器	シャット状筋和付含む 14世紀
	71	土師器	網小	12	焼田上	-	(4.0)	(0.8)	差	真	5Y7-6 褐色	ナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	
	72	土師器	蓋小	7	焼田上	-	-	-	瓶	真	10Y8-2 灰白色	ハタメ	ナデ	
	73	土師器	蓋小	8	焼田上	-	(3.6)	(1.8)	差	真	10Y7-4 に灰-黄褐色	ロクロナデ	ナデ (赤胎 5号)	9世紀-9世紀
	74	茶碗製品	煎茶	11	焼田上	(120)	(3.1)	(2.0)	-	-	-	-	-	100g

## 第5節 令和2・4年度発掘調査 遺構 (第4図)

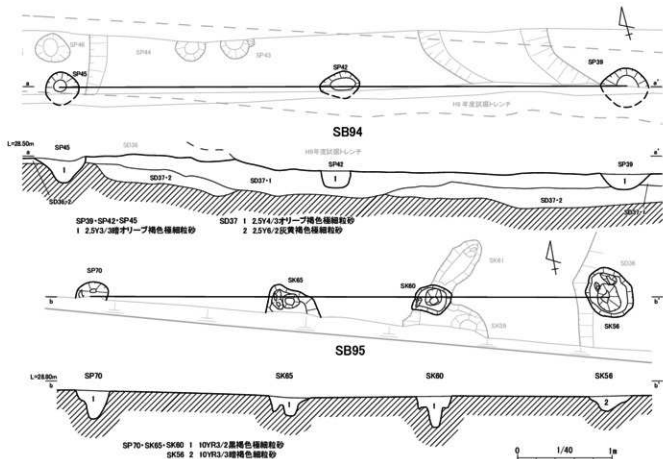
ここでは、2～14区で遺物が出土した遺構を中心に報告し、ほかの遺構は第2表にまとめた。整理作業の段階で、各年度の検出遺構を精査し、遺構番号を振りなおした。また、各年度の調査区の境界で検出した遺構は、調査区法面にかかるため確認できなかった箇所がある。その場合は破線で復元した。

確認した遺構の内訳は、河川流路2条、溝2条、掘立柱建物2棟、土坑23基、ピット22基、不明遺構5基である。古代、中世、近世の遺構がある。調査区東側の2～8区では、古代の河川流路と、ほぼ位置が重なる形で中世～近世頃に形成された自然流路を検出した。ほか、古代の自然流路が埋没した後は、掘立柱建物と推定されるピットや土坑を検出した。調査区西側の8～14区では、主に土坑、ピット群を検出した。

### 1 掘立柱建物 (第11図、図版7)

調査区が狭く、部分的な検出であるが、富山県財団調査で確認された掘立柱建物の方位と概ね合致するものを掘立柱建物の可能性がある遺構として示す。

SB94 4・5区に位置し、SD37より新しく、SD36より古い。SP39・SP42・SP45からなる2間の柱穴列と推定され、軸方向はN-76°-Wを示す。柱穴は径0.15～0.25mの円形で、深さ0.08～0.10mである。柱間距離は約3.00mである。遺物はSP39から古代の須恵器片・中世の土師器片が出土した。柱穴の規模から、中世の掘立柱建物跡の可能性がある。



第11図 令和2・4年度発掘調査遺構図(1)

SB95 8・9区に位置する。SK56・SK60・SK65・SP70からなる3間の柱穴列と推定され、軸方向はN-84°-Wを示す。柱穴は径0.40～0.99m、深さ0.10～0.38mである。柱間距離はSK56 - SK60が1.80m、SK60 - SK65が1.50m、SK65 - SP70が1.80mである。遺物はSK56・SK65から土師器片が出土した。SK56はSD36が形成される前にあることから、中世の掘立柱建物の可能性がある。

## 2 土坑(第12図、表2、図版8・9)

SK38 2区で検出した。SD35、SD36より古い。楕円形を呈し、検出長1.29m、検出幅0.40m、深さ0.24mである。遺物は須恵器杯(39)の破片がまとめて出土した。遺物から10世紀の遺構と考えられる。

SK40 4区で検出した。SD36より古い。不整形形を呈し、長軸0.70m、短軸0.50m、深さ0.12mである。幅0.2mのビットを伴う。遺物は土師器片が出土した。

SK51 6区で検出した。楕円形が横に2つ連続する形を呈し、長軸0.84m、短軸0.70m、深さ0.12mである。遺物は土師器片が出土した。

SK59 8区で検出した。SD37の西側に位置する。楕円形を呈し、長軸0.97m、短軸0.35m、深さ0.20mである。重複するSK60より新しい。遺物は土師器片が出土した。

SK68 9区で検出した。楕円形を呈し、長軸0.64m、短軸0.54m、深さ0.15mである。径0.20mのビットをもつ。遺物は須恵器の杯蓋(42)、土師器片が出土した。

SK78 10区で検出した。楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.32m、深さ0.03mである。遺物は須恵器の杯が出土した。

SK81 10区で検出した。不整形形を呈し、径0.85m、深さ0.17mである。遺物は土師器の甕が出土した。

SK86 11区で検出した。不整形形を呈し、検出長1.38m、検出幅0.48m、深さ0.17mである。底面は平坦ぎみとなる。遺物は土師器片が出土した。

SK87 11区で検出した。楕円形を呈し、検出長1.00m、幅0.30m、深さ0.13mである。遺物は須恵器の杯蓋(45)、土師器片が出土した。

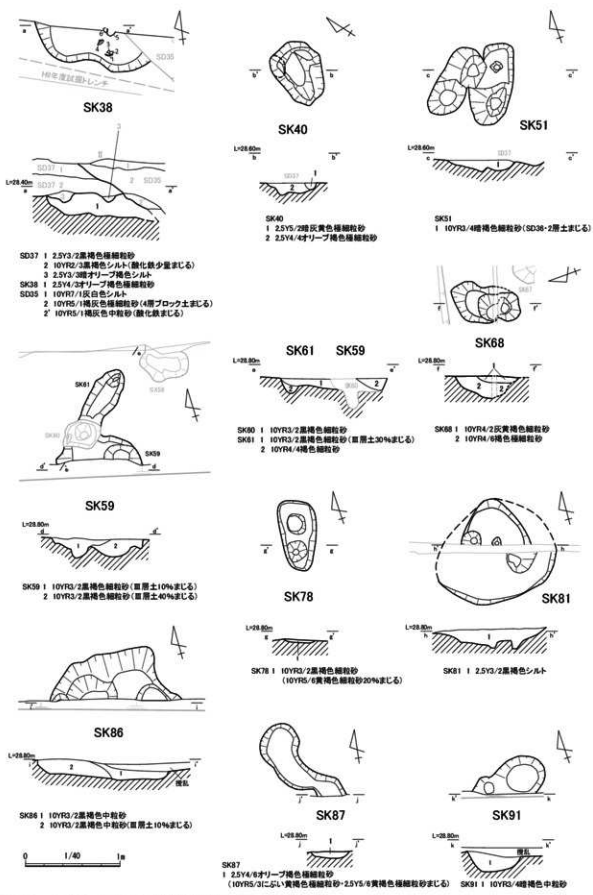
SK91 12区で検出した。楕円形を呈し、検出長0.56m、幅0.40m、深さ0.20mである。遺物は須恵器の杯蓋・小形壺の底部、土師器片が出土した。

## 3 溝・自然流路(第13図、図版9・10)

SD35 2区で検出した。SD36より新しい。幅2.30m、深さ0.68mで、底面はやや平坦となる。主軸はN-46°-Wである。断面観察から複数回の掘削が見られ、埋土には地山ブロックが多く含まれる。遺物は土師器の碗・長胴甕、珠洲の播鉢が出土した。切り合い関係から、近世以降に形成されたと考えられる。

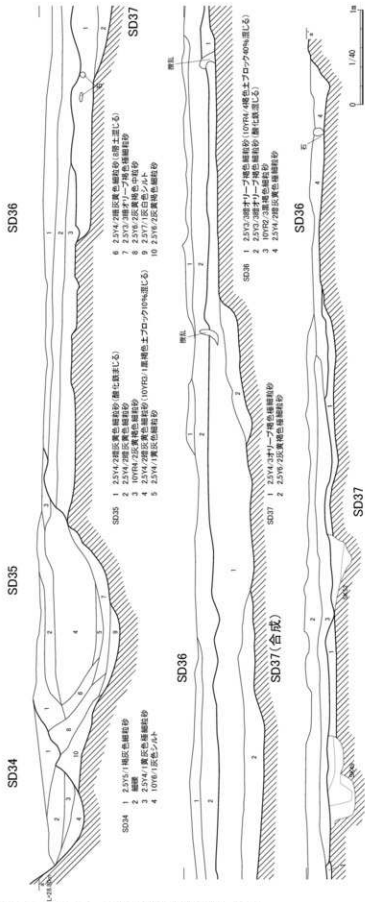
SD36 2～7区で検出した自然流路である。SB94より新しく、SD35より古い。主軸はN-15°-Eで、検出幅23m以上、検出深0.36mである。底面は平坦で、3層の埋土を確認した。遺物は須恵器の杯・杯蓋(46)・甕、土師器の碗(47)・赤彩土師器・小型甕、中世土師器(48)、珠洲、越中瀬戸(49)、近世磁器片(50)、鉄滓が出土した。中世以降に形成されたと推測される。

SD37 3～8区で検出した自然流路である。SD36より古い。主軸はN-30°-Eで、検出幅14.8～15.7m、検出深0.37mである。埋土は黒褐色土・地山ブロックが混じるオリーブ褐色土である。遺物は弥生土器の高杯(51)、須恵器の杯蓋(52)・杯(53)・小型壺(54)・甕(55)、土師器の碗(56)が出土した。

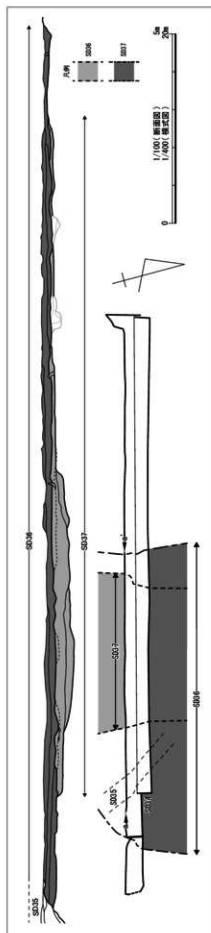


第12図 令和2・4年度発掘調査遺構図(2)





第 13 図 令和 2・4 年度発掘調査遺構図 (3)



#### 4 ピット (第14図・表2、図版9)

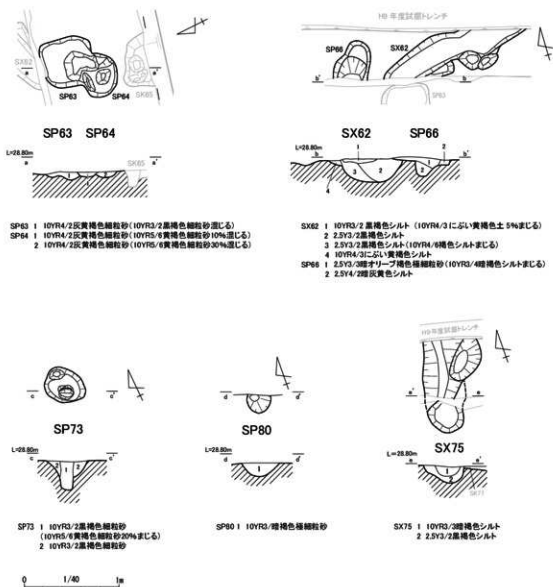
西側の微高地に多い。平面形は楕円形が多く、規模は径0.16～0.77mである。深さは0.10m程度の浅いものが多い。

SP63 9区で検出した。方形を呈し、長軸0.52m、短軸0.39m、深さ0.09mである。重複するSP64より古い。遺物は土師器片が出土した。

SP66 9区で検出した。楕円形を呈し、検出長0.64m、短軸0.40m、深さ0.20mである。遺物は土師器片が出土した。

SP73 9区で検出した。円形を呈し、径0.42m、深さ0.29mである。遺物は土師器の甕が出土した。

SP80 10区で検出した。円形を呈し、径0.3m、深さ0.13mである。遺物は須恵器の杯(44)が出土した。



第14図 令和2・4年度発掘調査遺構図(4)

第2表 令和2・4年度発掘調査遺構一覧

遺構名	区	平面形	長径 (m) (検出幅)	短径 (m) (検出幅)	深さ (m) (検出深)	出土遺物	備考・切りあい関係
SD34	2	直線	1.10	(0.40)	0.38	須恵器(杯)、土師器	現代
SP39	4	円形	(0.48)	(0.20)	(0.32)	須恵器片、土師器片	SB94 SD36下層
SP42	4	円形	0.30	0.20	(0.18)		SB94 SD36下層
SP43	5	円形	0.36	0.20	(0.14)		SD36下層
SP44	5	円形	0.46	0.20	(0.12)		SD36下層
SP45	5	円形	0.52	0.24	(0.24)		SB94 SD36下層
SP46	5	円形	0.36	0.30	0.05		I9 試掘トレンチ下層
SP47	6	円形	(0.45)	0.56	0.06		SD36下層
SP48	6	方形	(0.53)	0.80	0.05		SD36下層
SK49	6	方形	0.93	(0.18)	(0.28)		SD36下層
SK50	6	円形	0.82	(0.40)	(0.10)		I9 試掘トレンチ下層
SK52	6	楕円形	0.81	(0.22)	(0.22)		SD36下層
SK53	7	円形	0.4	(0.16)	(0.32)		
SK54	7	円形	0.5	(0.24)	(0.31)		
SK55	7	楕円形	(0.46)	(0.16)	(0.30)		
SP93	7	円形	0.16	0.12	0.10		
SK56	8	円形	0.48	0.43	0.10	土師器片	SB95
SX57	8	直線	0.44	0.38	0.18		
SX58	8	直線	(0.67)	(0.80)	0.16		
SP60	8	楕円形	(0.50)	0.39	0.32		SB95
SK61	8	楕円形	(0.53)	0.28	0.10		
SP64	8	円形	0.46	0.41	0.06		
SK65	8	方形	0.99	0.13	0.18	土師器片 1	SB95
SP67	9	楕円形	0.58	0.32	0.20		
SP69	9	楕円形	0.30	0.12	0.12		
SP70	9	円形	0.77	(0.16)	0.38		SB95
SP71	9	楕円形	0.40	0.29	0.14		
SK72	9	楕円形	0.90	0.34	0.07		
SK74	9	円形	0.97	(0.32)	0.06		
SP76	10	円形	0.36	0.14	0.12		
SK77	10	楕円形	0.90	(0.28)	0.20		
SP79	10	円形	(0.32)	(0.08)	0.11		
SX82	10	楕円形	(13.50)	(0.16)	(0.13)		
SP84	10	円形	0.50	(0.16)	0.18		
SK85	11	円形	0.86	(0.32)	0.21		
SK88	11	円形	0.60	(0.40)	0.15		
SP89	11	円形	0.36	0.32	0.12		
SK90	12	円形	(0.40)	0.52	0.09		
SP92	13	円形	(0.64)	0.46	0.27		

## 5 不明遺構（第14図・表2）

8～10区にかけて検出した。主に溝状を呈し、遺構の側面や内側にビット状の掘り込みが連続する。平面規模はばらつきがあるが、深さはいずれの遺構も約0.20mと浅い。

SX62 8区で検出した。溝状を呈し、北へ延びると推定される。側面には3基のビット状の掘り込みが見られる。底面は湾曲する。長軸1.00m、短軸0.64m、深さ0.20mである。遺物は須恵器の杯(40)、土師器の小型甕(41)が出土した。

SX75 9区で検出した。溝状に北へ延びると推定される。長軸0.62m、短軸0.43m、深さ0.16mである。SP71より古い。遺物は土師器の碗(43)が出土した。

## 第6節 令和2・4年度発掘調査遺物

古代と中世の遺物があり、一部近世のものがある。大部分は破片である。自然流路SD37からの出土が多く、次いで9～10区からの出土が多い。

### 1 土坑・ビット・不明遺構出土遺物（第15図・図版12）

SK38 39は須恵器の碗である。底部は回転ヘラ切りである。底部と体部の境は不明瞭で、口縁部までゆるやかに内湾し立ち上がる。口縁端部はやや外反する。高台は貼付高台で水平に接地する。体部には、ヘラで「/」が施される。口径13.95cm、器高5.75cm、高台径7.55cmである。10世紀頃と考えられる。

SX62 40は須恵器の杯である。器壁は薄く、体部から口縁部は直線的に立ち上がる。口径は12.4cmである。41は土師器の小型甕か。内外面に煤が付着する。

SK68 42は須恵器の杯蓋である。口縁端部は折れて垂下する。口径は12.7cmである。

SX75 43は土師器の碗か。底部は回転糸切りで、体部との境に段がある。底径は6.6cmである。

SP80 44は須恵器の杯である。底部と体部の境はゆるく屈曲し、丸みを帯びる。口径は9.9cmである。9世紀前半と考えられる。

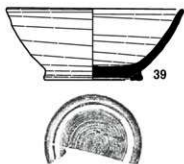
SK87 45は須恵器の杯蓋である。口縁端部は内側に巻き込み、内側に段が形成される。頂部は回転ケズリを施す。口径は16.0cmである。

### 2 溝・自然流路出土遺物（第15図・図版12）

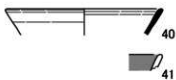
SD36 46は須恵器の杯蓋である。頂部は回転ケズリのちナデを施す。47は土師器の碗である。底部は回転糸切りである。底部と体部の境はゆるやかに屈曲する。底径は6.7cmである。48は中世土師器の皿である。口縁部に一段のヨコナデを施し、口縁端部をゆるく外傾させる。口径は15.9cmである。14世紀頃と考えられる。49は越中瀬戸の鉢である。ケズリ出し高台で、外面は回転ケズリが施され、体部の一部は施釉される。底径は8.8cmである。50は近世磁器の小鉢である。口縁端部には鉄釉、体部の内外面には透明釉がかかる。口縁は波状となる。

SD37 51は弥生土器の高杯の杯部片か。内外面ともにミガキと赤彩が施される。52～55は須恵器である。52は杯蓋で、口縁端部は折れて垂下し、口縁部から体部にかけて外側の境には稜が見られる。口径は17.5cmである。8世紀末頃と考えられる。53は杯で、口縁端部は外反する。口径は12.2cmである。54は小型壺で、体部には沈線が施される。8世紀末頃と考えられる。55は甕の体部片である。56は土師器碗か。底部は回転糸切りである。底径は6.0cmである。

SK38



SX62



SK68



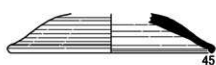
SX75



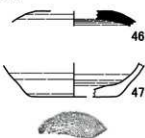
SP80



SK87



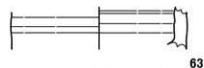
SD36



SD37



遺構検出時



0 1/3 10cm

第15図 令和2・4年度発掘調査遺物図(1)

### 3 遺構検出時・地山出土遺物（第15・16図・図版12）

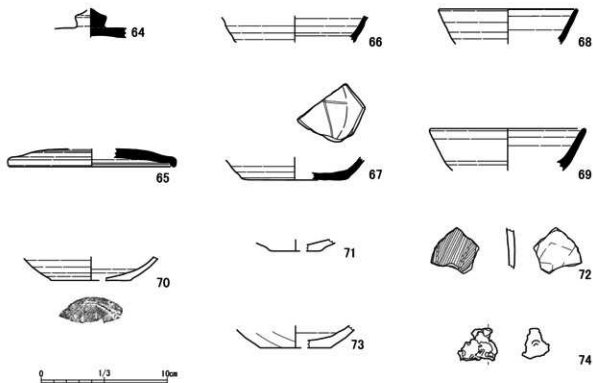
#### (1) 遺構検出時出土遺物

57～59は須恵器の杯蓋である。57・58は3区、59は12区の遺構検出時に出土した。口縁端部は57では丸くおさめ、58・59では折れて垂下し、断面形が三角形を呈する。口径は57で15.5cm、58で14.8cm、59で15.2cmである。60は須恵器の杯Aである。6区の遺構検出時に出土した。底部は回転ヘラ切りである。底部と体部の境は明瞭で、回転ナデが施される。底径は7.9cmである。61は須恵器の杯である。器高は浅めで、体部は内湾し口縁部付近で直線的に立ち上がる。口径は14.2cmである。9世紀中頃か。62は須恵器の甕の体部片である。13区の遺構検出時に出土した。63は越中瀬戸の匣鉢である。9区の遺構検出時に出土した。内外面ともに回転ナデと鑄軸を施す。

#### (2) 地山上出土遺物

64～69は須恵器である。64・65は杯蓋である。64はツمامミ部片で、やや扁平な宝珠形を呈する。径は2.45cmである。9世紀頃と考えられる。65は口縁端部が折れて垂下し、断面形は三角形となる。体部との境は段が形成される。頂部は回転ケズリのちナデが施され、器形は扁平となる。9世紀後半と考えられる。66～69は須恵器の杯である。67は底部内面にヘラ記号「×」が施される。70～73は土師器である。70・71は碗で、70の底部は回転糸切りである。底部と体部の境には段が見られ、口縁部に向かって内湾する。10世紀頃と考えられる。72・73は土師器の甕か。72は内面ハケメ調整、外面はケズリ調整を行う。73は底部をケズリ調整する。9世紀頃と考えられる。74は鉄滓である。重さは10.0gである。

#### 地山上



第16図 令和2・4年度発掘調査遺物図(2)

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 粒度分析

#### 1 はじめに

富山市任海に所在する任海宮田遺跡の調査で検出された溝遺構の堆積物の粒度分析を行い、堆積環境等について検討した。

#### 2 試料と方法

分析試料は、古代溝の埋土と地山堆積物から採取された堆積物2点である(表1)。分析は、湿式篩分けとレーザー回折式粒度分布を行い、粒度組成を調べた。

第3表 粒度分析を行った試料とその詳細

分析No.	遺構	堆積物の特徴	処理湿重(g)	含水率(%)	処理乾重(g)
1	溝埋土	オリブ褐色(2.5Y 4/4)、粘土質砂	100.00	27.00	73.00
2	地山	オリブ褐色(2.5Y 4/4)、粘土質砂	100.00	27.50	72.50

分析方法としては、適量を採取し、4φ以上の篩(0.5φ間隔)を重ねて湿式篩分けを行った。なお、各試料は、恒温乾燥機105度、24時間で乾燥して、処理試料の乾燥重量を計算した。4φ篩を通過した残渣は、一部を回収して超音波洗浄機で軽度に分散した後、レーザー回折式粒度分布測定装置(株式会社堀場製作所製LA-960)を用いて計測した。

湿式篩分けおよびレーザー回折式粒度分析結果から、堆積物の各粒度階の百分率(%)を求め、各試料の頻度%(5%、16%、25%、40%、50%、60%、75%、84%、90%、95%)、最頻値(φ)、中央値(φ)、平均値(φ)、分散(φ)、歪度(Sk)、尖度(K)を計算した。

#### 3 結果

表2に、湿式篩分けとレーザー回折式粒度分析による結果(重量および含有量)を示す。また、表3に各試料の頻度%、中央値(φ)、平均値(φ)、分散(φ)、歪度(Sk)、尖度(K)を示す。なお、表4に統計値の評価(Folk and Ward, 1957)を示す。図1.2に粒度分布図(粒径頻度および積算頻度曲線)を示す。

分析No.1(溝埋土)は、4φ以下のシルト・粘土の割合がやや高く(57.96%)、極細粒砂が最も多い(表2)。粒度分布は、二峰性を示す(3.0φおよび6.5φ:図1)。統計値では、最頻値(φ)が3.50、中央値(φ)が3.97、平均値(φ)が4.62、分散(φ)が1.81、歪度が0.43、尖度が0.73であった(表3)。

第4表 各試料の粒度分析結果(単位:%)

粒度 (φスケール)	粒径(mm)	粒度階区分	No.1		No.2	
			重量(g)	含有量(%)	重量(g)	含有量(%)
5.0	3200.00		0.00	0.00	0.00	0.00
4.5	2262.72		0.00	0.00	0.00	0.00
4.0	1600.00		0.00	0.00	0.00	0.00
3.5	1131.37	中礫 (pebble)	0.00	0.00	0.00	0.00
3.0	800.00		0.00	0.00	0.00	0.00
2.5	565.85		0.00	0.00	0.00	0.00
2.0	400.00		0.00	0.00	0.00	0.00
1.5	282.43		0.00	0.00	0.00	0.00
1.0	200.00	(granule)	0.02	0.03	0.03	0.04
0.5	111.32	極細粒砂	0.01	0.01	0.04	0.06
0.0	0.0000	(very coarse sand)	0.07	0.10	0.05	0.07
0.5	207.11	粗粒砂	0.10	0.14	0.07	0.10
1.0	600.00	(coarse sand)	0.18	0.25	0.14	0.18
1.5	853.55	中粒砂	0.32	0.44	0.23	0.32
2.0	250.00	(medium sand)	0.90	1.23	0.62	0.86
2.5	176.78	細粒砂	3.32	4.52	2.34	3.23
3.0	125.00	(fine sand)	7.61	10.42	6.35	8.76
3.5	88.39	極細粒砂	13.14	18.00	11.10	15.35
4.0	62.50	(very fine silt)	17.53	23.79	17.20	23.88
4.5	44.19	粗粒シルト	1.62	2.19	1.80	2.52
5.0	31.25	(course silt)	3.60	5.00	4.08	5.63
5.5	22.10	中粒シルト	2.81	3.85	3.12	4.27
6.0	15.62	(medium silt)	3.38	4.63	4.07	5.61
6.5	11.06	細粒シルト	3.25	4.39	3.00	4.28
7.0	7.81	(fine silt)	6.12	8.38	6.78	9.35
7.5	5.52	極細粒シルト	3.82	5.10	3.82	5.20
8.0	3.91	(very fine silt)	2.71	3.64	2.01	2.78
8.5	2.76		1.21	1.66	1.44	1.99
9.0	1.95	粘土 (clay)	0.50	0.67	0.78	1.08
9.5	1.38		0.28	0.38	0.41	0.57
10.0	0.98		0.08	0.11	0.18	0.25
10.5	0.69		0.00	0.00	0.00	0.00
11.0	0.49		0.00	0.00	0.00	0.00
11.5	0.35		0.00	0.00	0.00	0.00
12.0	0.24		0.00	0.00	0.00	0.00
12.5	0.17		0.00	0.00	0.00	0.00
13.0	0.12		0.00	0.00	0.00	0.00
13.5	0.09		0.00	0.00	0.00	0.00
14.0	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	
14.5	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	
15.0	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	
	合計		73.02	100.02	72.80	100.03

分析No.2(地山堆積物)は、4φ以下のシルト・粘土の割合が高く(63.94%)、極細粒砂が最も多い(表2)。粒度分布は、二峰性を示す(3.5φおよび6.5φ:図2)。統計値では、最頻値(φ)が4.00、中央値(φ)が4.42、平均値(φ)が4.87、分散(φ)が1.82、歪度が0.30、尖度が0.71であった(表3)。

#### 4 考察

分析No.1(溝埋土)と分析No.2(地山堆積物)について粒度分析を行った結果、両試料は、最頻値(φ)、中央値(φ)、平均値(φ)、分散(φ)、歪度、尖度において近い値の粒度組成を示した。

地山層の下位には、河川によって運ばれたと思われる礫層が見られ、地山層はその後の安定期に堆積した堆積物と考えられる。今回対象とした溝埋土は、この地山層の直上に堆積し、酷似した粒度組成を示すため、わずかな流下で移動・再堆積した堆積物である可能性が考えられる。

#### 引用・参考文献

Folk, R. L. and Ward, W. (1957) Brazos river bar: a study in the significance of grain size parameters. J. Sed. Petrol. 27, 3-26.

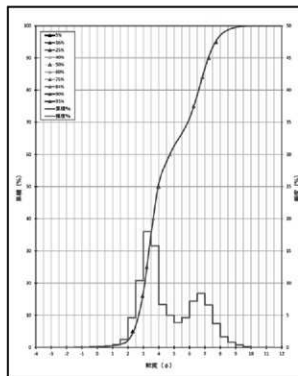
公文富士夫・立石雅昭(1998)新版砕屑物の研究法。399p, 地学団体研究会。

第5表 粒度分析による頻度%および統計値(歪度・尖度は、Folk and Ward(1957)による)

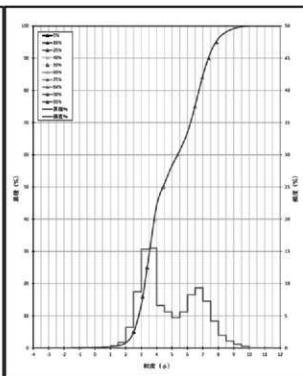
項目	No.1	No.2
頻度%(φ値)	5%	2.30
	10%	2.94
	25%	3.22
	40%	3.65
	50%	3.97
	60%	4.73
	75%	6.27
	84%	6.84
	90%	7.25
	95%	7.72
統計値	最頻値(φ)	3.50
	中央値(φ)	3.97
	平均値(φ)	4.62
	分散(φ)	1.81
	歪度	0.43
	尖度	0.73

第6表 分級度、歪み度、尖度の評価(Folk and Ward, 1957)

(φ 1分級度)		(Sk1 歪み度)		(KG 尖度)	
0.35 以下	非常に良い	0	対称	1	正規分布曲線
0.35 ~ 0.50	良い	-1.00 ~ -0.30	著しく負	0.67 以下	非常に扁平
0.50 ~ 0.71	やや良い	-0.30 ~ -0.10	負の歪み	0.67 ~ 0.90	扁平
0.71 ~ 1.00	普通	-0.10 ~ +0.10	ほぼ対称	0.90 ~ 1.11	中立的
1.00 ~ 2.00	悪い	+0.10 ~ +0.30	正の歪み	1.11 ~ 1.50	突出
2.00 ~ 4.00	非常に悪い	+0.30 ~ +1.00	著しく正の歪み	1.50 ~ 3.00	非常に突出
4.00 以上	極めて悪い	負:	悪い方へ偏する	3.00 以上	極めて突出
		正:	悪い方へ偏する		



第17図 分析No.1(溝埋土)の粒度分布図(粒徑頻度および積算頻度曲線)



第18図 分析No.2(地山堆積物)の粒度分布図(粒徑頻度および積算頻度曲線)



## 第5章 総括

今回の調査では、東部の工事立会の調査区で古代の土坑群、発掘調査区の中央付近で古代から近世にかけて削平と堆積を繰り返した大溝群、西部では土坑・ピット群が確認された。調査区は富山県財団調査のC 13・15 地区、C 14・23 地区（以下、財団C 13・15 地区と表記。他地区も同様）の中間に位置することから、ここでは、今回の調査で検出した遺構について富山県財団調査を参考に、調査地周辺の古代・中世の土地利用の視点からまとめ、総括としたい。

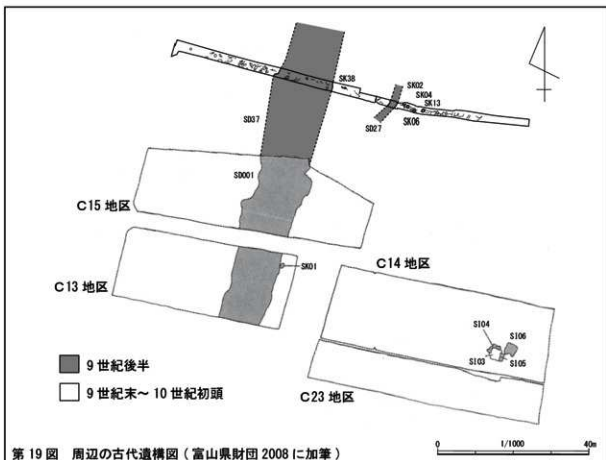
### 1 古代（第19図）

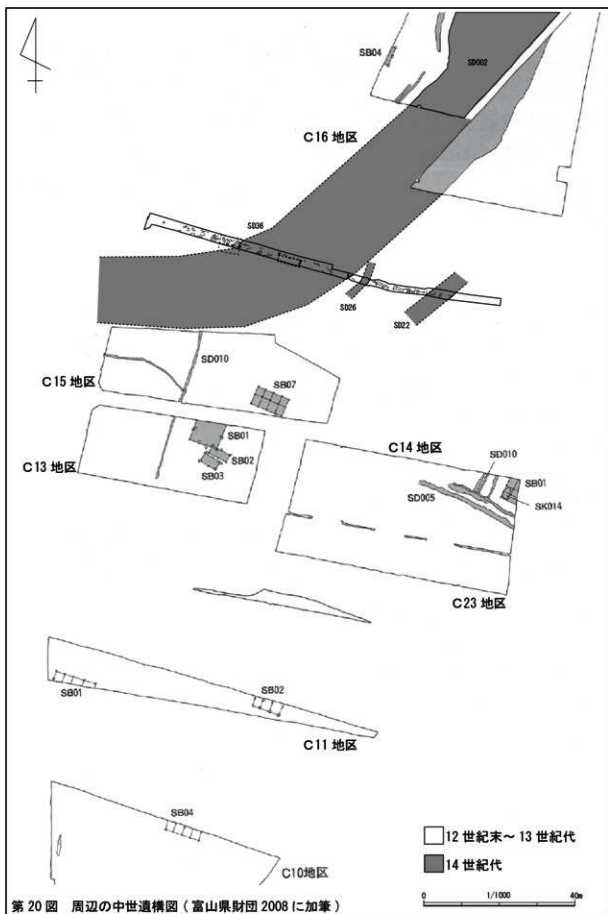
調査区内を南北に延びる溝 SD27 とその東側に展開する土坑群、自然流路 SD37 を検出した。

1 区で検出した SD27 は、古代以降に自然流路 SD28 の痕跡を利用し、人為的に開削されたと考えられる。幅 1.50m 以上で、礫層まで掘削が及んでいた。財団C 13・15 地区、C 14・23 地区、C 16 地区にこの溝とつながる遺構は確認できないため、調査区外で溝が折れ曲がると考えられる。

SD27 の東隣では土坑群を検出した。土坑は底面が平坦で、径 0.50m 以上と規模が大きく、かつ一部で柱痕も認められることから、掘立柱建物となる可能性がある。周辺の調査では竪穴建物 10 棟が検出されているが、掘立柱建物は確認されておらず、今回の調査で初めて存在を確認した。溝に隣接して建物が所在する様相から、建物は水運を利用した倉庫のような性格が想定される。

3～8 区で検出した自然流路 SD37 は、財団C 13・15 地区 SD001 の延長上にあり、幅も 14.3m と同規模である。財団C 13・15 地区 SD001 は 8 世紀後半から 9 世紀後半まで存続したとされ、SD37 でも 8 世紀末に比定される遺物の出土があることから、同時期まで存続したと考えられる。





第 20 図 周辺の中世遺構図（富山県財団 2008 に加筆）

## 2 中世・近世（第20回）

調査区内を南北に延びる溝 SD26、南西から北東に延びる溝 SD22、南西から北東へ流れる自然流路 SD36、SD36に削平された SB94・SB95を検出した。

SD26はSD27の埋没後に再度開削された溝で、断面観察から4回程掘り直しが確認できる。何度も掘り直しを要する主要な溝と考えられる。SD27と同様に、財団C地区にこの溝とつながる遺構は確認できない。

財団C 13・15地区の掘立柱建物の基軸方向とSB94・SB95は近似することから、同時期の遺構と考えられる。財団C 13・15地区は、中世遺構の分布では中央ブロックに属し、今回の調査区もこれに含まれる。中央ブロックでは、14世紀代に建物分布が南から北に移る（富山県財団2008）とされ、SB94・95は14世紀代に形成されたと推測される。

SD36は財団C 16地区SD002とつながり、調査区の西から北へ延びると推定される。SD002は14世紀代に「浅い谷状地形」として存在し、近世に埋没した自然流路である（富山県財団2008）ことから、SD36も同様な時期幅で存続したと考えられる。SD36（財団C 16地区SD002）を形成する際にSB94・95を削平しており、SB94・95はSD36が形成される前の建物跡である可能性がある。

財団C 16地区SD002の南～東側にかけて、財団C地区では15世紀代の建物跡が検出されている。今回の平成30年度工事立会調査区でも15世紀代のSD22や15～16世紀の溝や土坑などが検出されており、財団C地区と同様の遺構の広がりが確認できる。

## 引用・参考文献

五十嵐俊子 2016『魚沼神社蔵「大般若波羅蜜多經」についての私見 - 関わった人々と宮廟の所在について -』『大山の歴史と民俗 第19号』  
池野正明 2010『ロクロ土師器器具の生産と流通』『大境』28号  
上田秀夫 1986『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No.2  
高岡節編 1998『地川館跡調査報告書』  
富山県埋蔵文化財センター 1991『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』  
富山県埋蔵文化財センター 1993『任海遺跡 吉倉A遺跡 吉倉B遺跡』  
富山県埋蔵文化財センター 1994『吉倉B遺跡』  
富山県埋蔵文化財センター 1996『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』  
富山県埋蔵文化財センター 1997『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』  
富山県埋蔵文化財センター 1998『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』  
富山県埋蔵文化財センター 1999『富山県埋蔵文化財センター年報 平成9年度』  
富山県教育委員会 1988『昭和62年度富山県埋蔵文化財発掘調査概要』  
富山県教育委員会 1995『富山県任海宮田遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会 1996『富山県任海宮田遺跡発掘調査概要』  
富山県教育委員会 1997a『富山県吉倉B遺跡 任海宮田遺跡』  
富山県教育委員会 1997b『富山県内遺跡発掘調査概要Ⅰ 吉田遺跡 任海宮田遺跡 水橋二杉遺跡』  
富山県教育委員会 1998a『富山県内遺跡発掘調査概要Ⅱ 任海宮田遺跡』  
富山県教育委員会 1998b『富山県任海宮田遺跡発掘調査概要Ⅱ』

富山県教育委員会 1999『富山県友杉遺跡-任海宮田遺跡試掘調査概要』  
富山県教育委員会 2000『富山県任海宮田遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会 2005『富山県黒崎種田遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会 2008a『富山県内遺跡発掘調査概要Ⅱ - 若竹町遺跡 - 富崎遺跡 -』  
富山県教育委員会埋蔵文化財センター 2008b『富山県任海宮田遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会 2015『富山県若竹町遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会 2018『富山県黒崎大塚遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会 2020『富山県黒崎種田遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会 2021『富山県上野井田遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財調査委員会 1999『富山県任海宮田遺跡発掘調査報告書』  
富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財調査委員会 2000『富山県任海宮田遺跡発掘調査報告書』  
財団 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2005『吉倉B遺跡発掘調査報告Ⅰ』  
財団 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』  
財団 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2007『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』  
財団 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2008『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』  
財団 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2010『友杉遺跡発掘調査報告』  
堀内大介 2022『黒瀬大屋遺跡出土の馬形』『富山県の遺跡物語』No.23



完掘（西から）



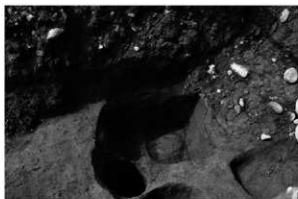
検出（西から）



SK01 完掘 (南から)



SK02 完掘 (南から)



SK03・SK25 完掘 (北から)



SK05 断面 (南から)



SK04 断面 (南から)



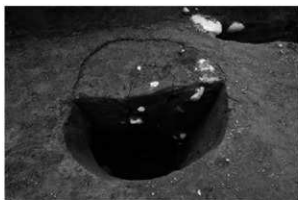
SK04 完掘 (南西から)



SK06・07・23 完掘 (北から)



SK08 完掘 (北から)



SK13 断面 (南から)



SK13 完掘 (南から)



SK14 完掘 (南西から)



SK19 完掘 (西から)



SD22 完掘 (北東から)



SK15・SK24・SD20・SD17 完掘（北東から）



SK15 断面（北から）



SD16・SK24 断面（北から）



SD20・17 断面（北から）



SD17 遺物出土状況



令和2年度調査区全景（北東から）



令和4年度調査区全景（北東から）



1区全景（南から）



SK29・SK30・SK32 完掘（南東から）



SK33 完掘（北から）





SD26・SD27・SD28 完掘（北から）



SD26・SD27・SD28 完掘（南から）



SB94 完掘（東から）



SB95 完掘（北東から）



SK38 検出状況（南から）



SK40 断面（北東から）



SK51 完掘（南から）



SK59・SK60・SK61 断面（西から）



SK68 完掘（北から）



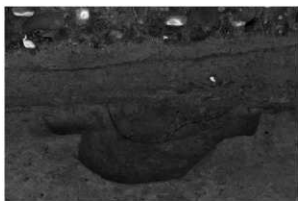
SK78 完掘（南から）



SK81 完掘（南から）



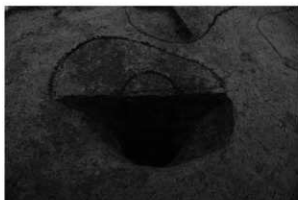
SK86 完掘（北から）



SK91 完掘（北から）



SP63・SP64 完掘（西から）



SP73 断面（南西から）



SP80 完掘（南から）



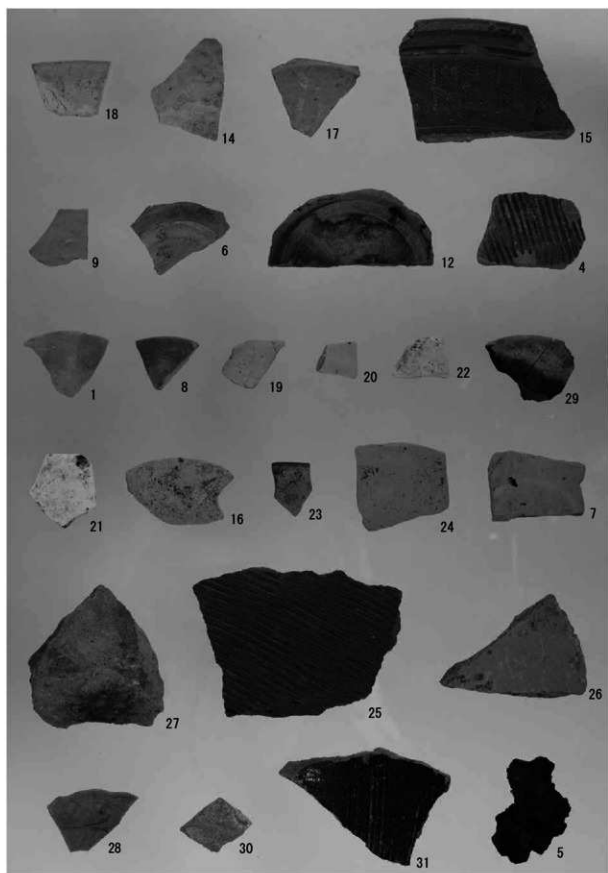
SD34・SD35 完掘（北から）



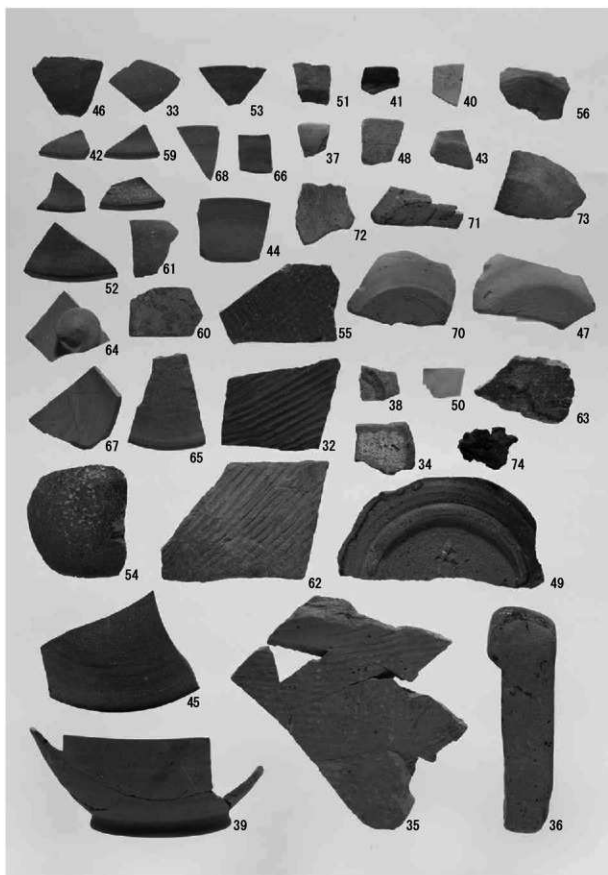
SD36 断面（北西から）



SD37 付近（北西から）



平成30年度工事立会出土遺物



令和2・4年度発掘調査出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	とやましとうみみやたいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書							
副書名	市道任海13号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	113							
編著者名	泉田佑希・堀内大介(富山市埋蔵文化財センター)、藤根久(株式会社パレオ・ラボ)							
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター							
所在地	〒939-2798 富山県富山市越中町連星754 In.076-465-2146							
発行年月日	2024年2月29日							
ふりがな 所取道路名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道路番号					
とやましとうみみや 任海宮田遺跡	とやましとうみ 富山市任海	16201	2010654	36度 38分 03秒	137度 12分 00秒	20190312～ 20190401	66.5	道路改良工事
						20201002～ 20201109	80.8	
						20221024～ 20221125	74.3	
所取道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
任海宮田遺跡 (2019年度 工事立会)	集落	古代	柱穴・土坑	土師器・須恵器・鉄滓		柱穴を検出		
		中世	自然流路・溝・土坑・ピット	中世土師器・珠洲・越前・青磁		掘立柱建物・自然流路を検出		
任海宮田遺跡 (2021年度・ 2022年度 発掘調査)	集落	古代以前	自然流路	弥生土器				
		古代	自然流路・土坑・ピット	土師器・須恵器・不明石器		自然流路を検出		
		中世	掘立柱建物・自然流路・土坑・ピット	中世土師器・珠洲		掘立柱建物・自然流路を検出		
		近世	自然流路・溝	越中瀬戸・瀬戸・磁器				
要約	<p>任海宮田遺跡は、富山平野南部の神通川と熊野川が合流する地点から約4km南方にある緩扇状地に立地する。標高は約29.5mである。</p> <p>調査では、掘立柱建物2棟、自然流路3条、溝、土坑、ピット、不明遺構を確認した。時期は古代・中世・近世であり、いずれも同一面を検出した。</p> <p>自然流路は、富山県財団調査C13・15地区で検出された古代の自然流路SD001とSD37が対応し、C16地区の中世～近世の自然流路SD002がSD36に対応する。</p> <p>古代は9世紀後半が主となる。柱穴や自然流路などを検出した。特に、柱穴は周辺の調査で確認されており、調査地周辺で初めて古代の掘立柱建物の存在を示唆する遺構が見つかった。この柱穴は溝SD27の東隣で確認されていることから、水運を利用した倉庫の可能性がある。</p> <p>中世～近世では自然流路SD37の東隣に14世紀～16世紀にかけて掘立柱建物や土坑、自然流路、溝を検出した。</p>							



富山市埋蔵文化財調査報告113

**富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書**

—市道任海13号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2024（令和6）年2月29日発行

発行 富山市教育委員会

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒939-2798 富山県富山市福中町連星754

TEL:076-465-2146 FAX:076-465-5032

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 株式会社なかたに印刷